

E・W・バージェスの「人間」概念の社会性

Sociality of E. W. Burgess' Concepts on "Human"

西川 知 亨

Tomoyuki NISHIKAWA

1 はじめに — 初期シカゴ学派の「人間」概念

社会学のシカゴ学派というと、R・E・パークとE・W・バージェスの名前が真っ先に挙げられることが多い。とりわけ、バージェスといえば、日本の社会学教育の世界では、第一に彼の同心円地帯理論が想起されることが多い。同心円地帯理論は、シカゴ学派の方法論上の枠組である「人間生態学」に基づいている (Burgess and Bogue eds. 1964)。だが、人間生態学は、問題点がいくつか指摘され、批判を受けている (西川 2003a, 2003c, 2004)。その1つが、「人間生態学」は、「人間」という言葉を含みながらもいわゆる「人間」的側面が抜けているという批判である。要は、部分的には、人びとを動植物と同じようにとらえることへの嫌悪にもとづく批判でもある。しかし、人間社会は習慣や文化、道徳が、生物的な競争をコントロールしている点こそが、動植物の群集とは違うとパークは述べていたのではないかと、シカゴ学派の研究者は反論する (cf. Park 1929)。さらに、人間生態学的視点はマクロな視点であり、人間の願いや価値といったものは、当時の言葉で言えば個人的ドキュメントを得ることで明ら

かになると主張もできる。だが、初期シカゴ学派の「非人間」性に対する嫌疑は晴れぬままである¹⁾。

一方、「教科書」どおりに社会学史を概観してみれば、初期シカゴ学派の衰退とともに、パーソンズの構造-機能主義の時代が到来する。その後、第二次シカゴ学派、つまりシカゴ社会学の流れを汲むシンボリック相互作用論者などによる逆襲により、「人間」の側面を復活させた社会理論の時代が到来したとされている。では、そのように言われる場合、後に、シンボリック相互作用論などという形で継承された可能性がある、初期シカゴ学派の「人間」の考え方は、どこにあるのだろうか。あるいは、「人間」にかんする考え方については、初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派のあいだにつながりはなく、人間重視の着想は、第二次シカゴ学派において突然出現したのだろうか。否、そうではない。

1) こうした嫌疑は、「人間生態学」に替わるタームとして「社会生態学」を用いるべきであるという主張が登場したことと関連性がある。シカゴ大学レーゲンスタイン図書館のスペシャルコレクション調査センターのバージェス・ペーパーズのなかに存在するバージェスの講義レジュメによれば、こうした議論は、バージェス自身の講義でも取り扱われたトピックである (Burgess Papers Box 290; Folder 9)。

本稿では、初期シカゴ学派の「黄金時代」を先導したバージェスに光を当て、彼のなかにある人間重視の視点を浮き彫りにする。具体的には、バージェスの豊穡な作品群のなかから、とくに彼の「人間」概念を抽出し、人間性、人道主義、人間的側面の概念を検討する。これらの3つの概念は、バージェスの研究史を通じて用いられてきたが、前者2つは、主に彼の社会調査論から抽出したものであり、後者1つは、主に彼のエイジング研究から抽出したものである。そうした検討により、バージェスの社会学的方法論は、人間生態学批判の文脈でとらえられるよりも（cf. Glazer 1966）、その後の第二次シカゴ学派の社会学者によるシンボリック相互作用論やスティグマ論を予期するかのように、「人間」の価値や意味世界を考慮に入れたものであるということを示す。それと同時に、マイクロ偏重というシンボリック相互作用論に対する批判的視点から言われているイメージや、一般社会で聞こえのよい概念として流通している「人間」概念よりも、より社会構造に志向した社会性を有した概念であることを示してみたい。

実際、初期シカゴ学派の社会学者は、いわゆる「巨匠」のパークの考え方に導かれて、都市の「人間」的な側面を抽出しようと試みてきた。つとに知られているように、パークはシカゴという都市を一つの「実験室」としてとらえた。そして都市は、人々の内に秘めた野心や抑圧された願望といった「人間（の本）性」がよくあらわれる場所であると考えた（西川 2003c）。たしかに、初期シカゴ学派の重要な遺産であるシカゴ・モノグラフに登場する人びとは、シカゴという大都市の舞台上でさまざまな形で人間性を表出していた。たとえば、クレッシーの『タクシー・ダンスホール』に登場する、タクシー・ダンスホールに集う男性達は、女性ダンサーたちとの踊

りを楽しむことで、都市での寂しさを癒そうとしていた（寺岡 2003）。フレイジアの『シカゴの黒人家族』における黒人たちは、何とか自分たちの人生・生活をよりよくしようと、手持ちの社会的・経済的な資源・資本を用いて生活の組織化を試みていた（西川 2003b）。

有名なエピソードとして、パークは「君もまた、あの忌々しい善意だけの社会改革家（do-gooder）なのか！」「道徳的な人間が社会学者になるのは、不可能だ！」と語ったといわれる（cf. Raushenbush 1979）。だが、バージェスの道徳的感覚は、パークのそれとは性質を異にしていた（cf. Janowitz 1972, 1973; Park 1935）。初期シカゴ学派のもうひとりの「巨匠」であるバージェスは、ある意味ではパーク以上に、「人道主義」の立場から、都市あるいは近代社会における「人間」らしさとは何かと考えた。その意味で、バージェスのテキストは、「人間」概念に内在する価値と社会性について考察するのに適している。しかも、バージェスの「人間」概念は、さまざまな組織のキャッチフレーズとして用いられる「人間」概念よりも、より社会との関連性を有しているように思われるのである²⁾。

本稿の構成は、次のとおりである。第2節では、第二次シカゴ学派の社会学者によって展開されたレイベリング、道徳的事業家、ス

2) 近年、「心理学化する社会」「癒し」「スピリチュアリティ」「脳化」、あるいは「人間力をつける』とか、心のあり方論、道徳論に堕しがち（本田 2007: 18）な現状が問題となっている。バージェスの「人間」概念は、こうした現代の日本社会における大きな批判的見地としうる概念となる可能性がある。「人間」概念は、一般的な概念としてとらえられれば、社会的な文脈を欠いているという誤解を生みやすい。しかし、バージェスの「人間」概念はそうではない。社会制度や権力者に起因する問題を覆い隠した上で、社会あるいは個人にあらわれた問題を、すべて個人や「こころ」の問題に帰してしまう一部の現状に対する批判的視点の一つとなりうる。この意味で、バージェスの「人間」概念は、社会学史、社会学的方法論などの文脈から、もっと強調、活用されてもよいと思われる。

ティグマなどの概念を例にとり、第二次シカゴ学派の社会学者による仕事との関連性を示唆するような、バージェスの人道主義にかんする記述を考察する。第3節では、「人間性」の概念は、動的な近代社会において立ちあらわれる無視し得ないものであるとバージェスが考えていたことが示される。第4節では、バージェスの人道主義が、個人と社会との動的過程をとらえる「価値」の一つであることが明らかとなる。第5節では、バージェスの後年のエイジング研究において、高齢者の態度や欲望などの「人間的側面」は、心理学的あるいは行為者論的な観点を超えた、いわば社会的なものであることが示される。

バージェスの「人間」概念を検討する手始めとして、第二次シカゴ学派の仕事との関連性を示唆する記述について簡単に考察しておこう。

2 人道主義と第二次シカゴ学派？

2.1 レイベリングとセレクトティブ・サンクション

レイベリング論やスティグマ論をはじめとして、第二次シカゴ学派の社会学者の仕事に見られる人道主義的な視点は、バージェスにも見られる。ここでは、手始めの問題意識として、第二次シカゴ学派、とくにベッカーやあるいはゴフマンらのレイベリング・パースペクティブに類似した視点が、バージェスの人道主義に関する論考においてどのように見られるか考察しておこう。

初期シカゴ社会学史を概観するフェアリスも指摘するように、バージェスにはたしかに、シカゴ学派第一世代のビッグ・フォーの一人であり、もともと牧師であったチャールズ・R・ヘンダーソンの人道主義的な関心が継承されているともいえる (Faris [1967] 1970=1990: 35)。人道主義は、とくにバー

ジェスにとって思い入れのある概念であったかもしれない。バージェスによれば、人道主義は、アメリカ人の信念のなかでも大きな位置を占めているという意味で、個人主義と民主主義と並列した概念である。そしてこれらは直接お互いに矛盾してしまうことも多い。個人主義、民主主義、人道主義はすべて、サムナーが「ペーソス」と呼ぶものによって、批判を受けるのを免れている。

ペーソスは、ある年代やある人たちにお気に入りの概念を取り囲むように生じるセンチメントの魔力であり、それは批判から保護されている。……人道主義は、ペーソスによって生まれ、そしてペーソスを刺激する。「貧困者」と「労働者」はペーソスの対象である。そうした理由で、これらの用語は、文学においては因習的で非現実的な概念を指している。結果として、貧困者とか労働者にかかわるあらゆるトピックで現実を適切にあらわすような議論はない。(Burgess [1935] 1974: [5-6] 292)

社会的な弱者、あるいはアンダードックに対する視点は、のちにたとえばハワード・S・ベッカーが継承している。1960年代のエスタブリッシュメントへの抵抗運動と、レイベリング論の隆盛である。後で論じるが、バージェスは後年、高齢者という社会的弱者に対するレイベリングとその抵抗に関して論じている。バージェスによれば、60代や70代の人々は、自分自身を「年寄り (aged)」もしくは「老人 (old)」とすら思っていないために、このような「レイベリング」は止めてほしいと考えている。彼らは自分自身を「ミドルエイジ」もしくは、たかだか「年長者 (elderly)」ととらえている。彼らが80代になってようやく

はじめて「老人 (old)」もしくは「年寄り (aged)」であると認めるのである。高齢者らは、65歳以上という「生活年齢」で、高齢者というカテゴリーに一括されることへ不満を感じている。彼らは、能力、才覚、生産性の面でかなり個人差があることを強調し、そのように人びとがとらえるように訴え続けているのだという (Burgess 1955a: 51)。

人道主義は、社会福祉の制度を確立するための動機となるものであった。バージェスは次のように述べる。

<人道主義>は、常にというわけではないが、個人主義、民主主義の原理と歩調をあわせている。自分が正しいと思うことを他人に対してしたいと思う人間のセンチメントは、社会改革への、そしてアメリカ合衆国に社会福祉制度を作ろうとする主な動機づけとなってきた。

社会運動は、社会にかかわろうとする心意気を持った人自身の関心とサポートを得ながら、たちあられたあらゆる社会問題を処理するために生まれてきた。そうした運動を数えればきりがない。少し挙げれば、公共の健康、教育の進展、よりよい住居、慈善事業、精神衛生状態、精神薄弱者のケアもしくは殲滅³⁾、ソーシャル・セツルメント、遊び場とレクリエーション、コミュニティセンター、労働法、客員教員、社会的衛生状態、悪徳への対抗、少年裁判所、保護観察、仮釈放、酒場への抵抗、そしてソーシャル・サーベイ、にかんする各運動である。

これらの社会運動のすべてには、リーダーとして人間の福祉に献身する人々がいた。これらの運動によって育てられた組織は、一般的に高いレベルの奉仕事業を継続した。しかしながらこれらの非常に多くの社会運動は、公共の健康の領域を除けば、それらに多くの資金を投じたことを考えれば、十分な成功を取めたとはとてもいえないのである。

しかし、自発的な機関は、大衆の行動を組織化していくうえで、政治制度などよりも大きな成果を挙げてきた。福祉機関のクライアントは、その大部分は外国人である。彼らの生活が抑圧されていることに抵抗するのは、少なくとも彼らがアメリカ化されてからである。あらゆるアメリカのコミュニティの悪名高い事実、社会の「柱」と思われている最良の家族に法律はあまり厳しくは適用されない、という事実である。(Burgess [1935] 1974: [8] 295)

これだけ見れば、バージェスは特別な意図もなしに書いているように思えるかもしれない。だが、引用の後半部分では、後年、第二次シカゴ学派の社会学者たちが好んで指摘した考え方を含んでいる。つくられた規則が平等には適用されないという側面である。これについては、後年、第二次シカゴ学派のH・S・ベッカーらレイベリング論の社会学者たちが、セレクトティブ・サンクションの概念で問題化している⁴⁾。

3) 20世紀初頭、アメリカ合衆国では「優生学」の考え方が広く展開されていた。その象徴は、1907年にインディアナ州で世界初の断種法 (Sterilization Law) が制定されたことである。なお、W・I・トマスが「優生学——人の種を改良する科学」論文を発表したのは、1909年のことである。

4) さらに、D・J・ブラックが、法の適用のスタイル、量、方向などに関する論議を展開している (cf. 宝月 2004: 163-9)。たとえば、下層の人びとに適用される法律のほうが、上層の人びとに適用される法律よりも多いのである。バージェスが指摘する「人道主義」からのパースペクティブとも響きあっている。

2.2 人道主義と道徳的事業家

後年、人道主義者たちの規則制定・施行については、シカゴ学派の系譜で言えば、第二次世界大戦後、ガスフィールドやベッカーが論じている。ベッカーは、「規則とは何者かのイニシアティブによる産物であり、われわれはこのような企画を展開する人間たちを道徳事業家 (moral entrepreneur) と呼ぶことができ」、「規則創設者のプロトタイプは改革運動者 (crusader) である」と論じる。同時に「道徳改革主義者というのは、自己の道徳を他人に強要することに関心をもつお節介だということである」(Becker 1963=[1978] 1993: 214-5) と論じる。相互作用論の伝統を概観するコリンズも指摘しているように、ベッカーは、「他者におしつけるべく逸脱の諸カテゴリーをつくり出そうとする当局側の人びとの策術を分析するために、『道徳的事業家』の概念を作り出した」(Collins [1985] 1994=1997: 269) のである。それは、ベッカーを代表者として当時のシンボリック相互作用論者のあいだで広がっていた、「クール」なアンダードッグの視点でもある。

もちろんガスフィールドもベッカーも、バージェスの文献を読んでいると推測されるが、いずれにせよ、バージェスも、近代社会における人道主義と道徳的事業家との関連について考察している。バージェスによると、人道主義者は、人を好ましい状況に導くために、自発的な努力をする。しかし、失敗に終わるのを見ると、彼らはまず改革運動 (crusade) を起こそうとする傾向にあり、次に、改良 (reform) を確実にする法規を作ろうとする。これは人道主義連合、モーレスにおける民主主義的な概念をよくあらわすものになっている。しかし、人道主義は、自由放任主義 (laissez-faire) や個人主義とは相容れない。

大衆運動も、モーレスにおける人道主義と民主主義のセンチメントがあわさったものによって推進される。だが、同じようにモーレスにある個人主義に深く植え込まれている個人の自由のセンチメントとは矛盾する。さらに、ヨーロッパの人々は、アメリカ人の特性として「偽善」を挙げる。この「偽善」は、アメリカ人の人道主義的なセンチメントから自然な流れを受けている。アメリカ人は、他者に対する福祉上の関心のために、他人に対して自分たち自身の行動規準、もしくはそれ以上のものを課したいと思ってしまうのである。多くのアメリカ人は、心から自分たちの同胞の弱者のためということで、禁酒派 (dry) として一票を投じた。しかし、自分たちは禁酒をすることなく (wet)、酒を飲み続けたのである。南部の農園主は、自分の黒人の借地人を守るために禁酒法に協力する高潔な思いを持っていた。しかし、自分自身の酒の貯蔵が減ることはないだろうと心の奥底では考えていた。また、ソーシャルワーカーは、生活保護を受けているクライアントに、家事と行為の規準を維持させようとする。だが、実際に自分自身はその規準を満たしていないことに気づいているのである (Burgess [1935] 1974: [8] 296)。

2.3 人道主義・人間性とスティグマ

後で述べるように、バージェスは人道主義の立場にもとづき、社会的弱者の立場にいる人々の具体例として、後年には、高齢者の研究を行っている。

都市においては、とくに中流階級のあいだでは、子どもたちのうち経済的な便宜を受けているのは、多数というどころかほんの少数である。子どもたちは、もはや経済的な援助を得られるのではない。

彼らが雇用されるや否や、経済的に依存しなくなる。彼らはまた、傾向として、結婚後、彼らの両親の近くに住むということはあまりない。都市においては、高齢者の大多数は、農場経営のような自営というよりも雇用者である。退職すると、彼らは地位を失う。さらに多くの者は、農村で受けることのできるような援助を受けることが出来ず、経済的に依存できない。これらすべてに増して、以前の大家族という家族統一体を破壊する最も大きな要因は、年長世代と若い世代のあいだの文化の違いが広がりつつあることである。老いていく両親は、「時代遅れ」とか「ビクトリア中期のような古い人」というふうに、近代的でより慣習的〔コントロール下に〕でない彼らの子どもからスティグマを貼られるのである。（Burgess [1957] 1974: 338）

後年、第二次シカゴ学派の一員と位置づけられるゴフマンは、社会関係のなかでたちあられるさまざまなマイナス・シンボルの様相について考察している。彼の有名なスティグマ論である。ゴフマンは、『スティグマ』の仕事を、伝統的な社会学の枠組み、とりわけ初期シカゴ学派の枠組みで総括している。すなわち、「伝統的な社会問題の諸分野である民族関係、人種関係、社会解体の過程、犯罪学、社会病理学、逸脱」、あるいは「人種関係、加齢（エイジング）、精神衛生」などの分野からの共通性を抽出しようとしたのだという。さらに、「これらの共通点は人間性（human nature）に関するごくわずかの前提に基づいて組織化することができる」のだと論じている（Goffman 1963=2003: 245-6）。ただしゴフマンは、バージェス流の人道主義的関心というよりも、「あまりにも人間く

さい自己」概念に象徴されるような意味での、相互作用秩序論上の人間性の側面にとくに注目した（Goffman 1953, 1959）。それは、ゴフマンの業績と生活史との関係を考察するヴァンカンも論じているように、E・C・ヒューズ流のクールな視点であることは付言しておく（Winkin 1988; 1999; cf. 野田 2003）。

3 近代社会における人間性の表出

3.1 近代社会の社会計画における人間性

では、さらに、バージェスの論考に依拠しながら、バージェスの「人間」概念について考察していこう。近代社会、モーレス、エイジングに関するバージェスの論議のなかから、「人間」概念、すなわち人間性、人道主義、人間的側面の社会性について明らかにしていく。まずは、近代社会における人間性の表出という文脈である。「人間性」とは、人々の内に秘めた野心や抑圧された願望を指し、パークが都市のなかで立ちあられると論じたものである。

バージェスは1930年代に、近代社会における社会計画を論じるなかで、人間性について考察している。後でも論じるが、バージェスは社会計画という科学性に基づいた政策を推進していくためには、アメリカのモーレスを無視してはならないと主張する（西川 2007a: 88）。そのモーレスとは、個人主義、民主主義、人道主義の3つである。この3つのモーレスに基づいた社会計画を模索する中で、バージェスは、人間の感情、態度、願いとといったものを考慮に入れるべきだと主張する。その社会背景としての文脈となるのは、初期シカゴ学派の社会学者たちが関心を寄せてきた「近代」における社会潮流である。社会計画については、別稿でバージェスの社会政策論を検討するなかで論じているが（西川 2007b）、改めてバージェスの議論を追ってみ

よう。

バージェスの主張によれば、アメリカで社会計画を成功させるためには、3つの条件が必要である (Burgess [1935] 1974: [15-6] 304)。第1に、社会計画は、個人主義と民主主義の価値が保護され、はぐくまれ、そして展開されるような自由社会、という伝統的な枠組みのなかで進行するというものである。生産者であれ消費者であれ、アメリカの大衆のなかで作られるさまざまな自発的な連合集団は、最小限の政府の監督と規制のもとではぐくまれるべきである。自由社会において人々の幸福を追求するなかで、人々が社会的、経済的な安心を目指して提言していくことが望ましいとバージェスは考えた。アメリカ流の社会計画を成功させるための2つ目の前提条件は、個人主義、民主主義、人道主義の考え方を完全に、そして徹底して更新していくことである。こうした考えを更新する上で参照すべきなのは、開拓者の時代ではなくて、都市的、技術的な「市民化」の現実であるという具合に、バージェスは近代化論の枠組みで考察している。アメリカで社会計画を成功させる3つ目の条件は、専門家と技術者が機能的にその事業に参加できるようにすることである。しかし、当時、ワシントンの「専門委員会 (brain trust)」は集中砲火の攻撃を浴びさせられた。民主主義は、平均的な人を賛美し、その主張を尊重する。しかし、一般大衆には、専門家サービスは信頼されにくく、確立が難しいというお決まりの問題をよくあらわしている。

ここでバージェスは、同時に、専門家や多くの「改良家」と呼ばれる人たちに問題点を投げかける。これはもっと些細でありながら難しい問題であるという。つまり、一般大衆がいなく専門家に対する不信は、大部分において、人間の状況を抽象的に扱うためである

ということである。平均的な一般人にとってみれば、専門家や改良家のような人は、それにかかわっている人間の感情、態度、願いを十分に考慮に入れることなく、福祉プログラムを形成し、支持して行こうとするような存在に見えるのである。人々の感情、態度、願いといった、パークが「人間 (の本) 性」と呼ぶ生態学的なものを無視しては、社会計画は成功しないというのがバージェスの主張である。

3.2 機械的視点に対する批判としての人間性 — 動的な近代社会のなかで

こうした「人間性」にかんする主張は、動的な近代社会をとらえるには、原子論的、あるいは機械論的な枠組みではとらえることができないという主張のもう一つの側面である。

バージェスが随所に主張するように、人々の感情、態度、そして願いは、社会的な状況の一部である。そのために、十分に考えられなければならない事柄である (Burgess [1935] 1974: [16] 305)。バージェスがまた言うように、訓練と関心さえ十分であれば、社会学者こそが、社会状況における人間の要因、つまり「人間性」、伝統と習慣を取り扱うのに適しているのである。社会学者は、自然科学者が物理的な自然を扱うのと同じような方法で、人間性を扱おうとしてしまうことがあまりにも多い。つまり、人間性を、機械的事物のように扱ってしまうのである。しかし、「人間性」と人々の習慣や伝統は、まさに生きた有機体であり、変化しやすいものである。だが、変化は成長の本質である。ただし、それは外部環境の条件による既存の傾向によってかなり影響を受けてはいる。

それゆえ、バージェスにとってみれば、社会計画のプログラムは、技術的もしくは物質的变化ばかりでなくて、その社会の非物質的

文化、習慣と制度も考慮に入れるべきなのである。「人間性」にかかわる諸要因を含めた状況のすべての要因が十分に考慮に入れられ、伝統的なアメリカの価値が守られていると確信できたなら、大衆の専門家に対する不信感 は解消されるとバージェスは考える。さらに結論から言えば、サムナーの社会変動におけるモーレスの役割の分析は、変動があまり起こらない「原始人」の静的な社会を研究したものであるということができる。近代社会は、静的ではなく動的である。技術的な変化は急速に起こり、それに続いて数多くの社会的、経済的結果をもたらす。それゆえ、問題は、ダイナミックで急速な変化を遂げている近代社会に、サムナーの説明をどの程度、そしてどのような修正を施せば適用できるかということになる。実際、サムナーは、「文化遅滞 (cultural lag)」と呼ばれる現象のなかで、変わりにくい (inertia) モーレスが変化するのに気づいていたのは疑いがないとバージェスは述べる。

社会を原子論的にとらえることに異を唱える立場は、デュルケムと共有している。さらに、機械論を批判しながらも、広義の実証主義の立場で社会をとらえる視点も共有している。しかし、デュルケムが描いていた社会像よりも、近代社会はより過程的で流動的であるという考え方を、シカゴ学派の社会学者たちは共有していた。バージェス自身、1955年にも、変動過程、変動のテンポは速くなり続けていること、急速で連続的な変動過程は、完全にアメリカ社会をあらわしている、という意味で、アメリカ社会は動的であると論じている (Burgess 1955b: 355)。

4 モーレスとしての「人道主義」と価値

このような近代社会における人間性の議論は、バージェスの場合、＜初期の＞初期シカ

ゴ学派の人道主義的な社会観に基づいているようにも思われる。

人道主義な立場で有名な社会学者に、先に触れたヘンダーソンがいる。エルスワース・フェアリスの子のロバート・フェアリスは、「ヘンダーソンは、社会学史に残る業績は何一つ残してはいない」と評しているが、同時に、バージェスらの研究に見られる人道主義的な関心は、部分的にはヘンダーソンとの研究に起因しているかもしれないと述べている (Faris [1967] 1970=1990: 35)。第一世代の創成期のシカゴ学派社会学者であり、もともと牧師で人道主義的な社会学を展開しようとしたヘンダーソンは、1910年代のバージェスに影響を与えていると考えられる。

こうした人道主義的な関心は、シカゴ学派社会学者たちの1910年代の社会改良的な研究活動で明らかになる (Burgess 1916)。しかしその後、1920年代のシカゴ学派の「科学」の時代を迎え、社会改良的な研究活動は影を潜める (Burgess [1925] 1967, 1927)。しかし、その後もバージェスは人道主義とそれにもとづいた社会政策・計画的な関心を持ち続けたとも言われている。バージェスは1930年代、「社会計画」の概念のなかで、社会学者がなしうること、社会学の独自性について真剣に考えようとしたのである (Burgess [1935] 1974)。社会計画は何も、政治学や経済学の専売特許というわけではない。むしろ、異分野とされてきた社会計画の分野にこそ、社会学の独自性が発揮される土壤があるのである。ここで「経済学や政治科学が見過し、無視してきたもの」としているものが、社会学の独自性が発揮される対象であると考えていた。先に触れたように、このなかで、アメリカにおいて社会計画をおこなううえで、無視してはならないモーレスとして、バージェスは、「個人主義」「民主主義」「人道主義」

を挙げる。これらのモーレスは、近代社会におけるアメリカのモーレスであると同時に、バージェス自身もふかくコミットしていたモーレスであるとも考えられる。このモーレスは、社会的な要素としての「価値」である。この価値概念は、(態度とのセットで論じる) W・I・トマス以来、シカゴ学派の社会学者が「個人と社会」の動的過程を描くためのひとつの道具となっている。後にバージェスは、シカゴ社会学の先達を引き合いに出しながら、人々が生きる集団がコミットする「価値」について、次のように述べている。

社会学的調査にとって「価値」は重要なデータである。シカゴ学派の創成期に活躍した、アルビオン・W・スモールは、この仮定をはじめて明確に定式化した社会学者の一人である。スモールは、「人類の歴史は、人間の価値の進化である」と述べている。

ヒトは、価値を付与する動物である。他の動物で価値をもつものはない。厳密に言えば、人間の行動は、そのほとんどが生物学的ではない。それはほとんど、社会的な行動でありおこないであると言ってよい。おこないとは、それが認められるか認められないか、正しいか間違っているか、よいか悪いか、適切か不適切か、美しいか醜いか、神聖であるか罪深いか、聖なるものか俗なるものか、道徳的なものか功利主義的なものか、というような、行動に対する集団の定義に対応している。

集団も人びとも価値を有している。我々はみな、価値の世界に生まれ落ちたために、集団の価値は重要な意味を持っている。人々の持っている価値は、集団の価値から派生したものである。価値の研究は、人間の行為の動機を理解するために

は重要なものである。W・I・トマスが述べているように、価値は人びとが属している集団が作った「状況の定義」である。

あらゆる集団は、その集団に特有の価値、つまり自分たちの「状況の定義」を有している。たとえば、昔のアメリカ家族は、権威 (authority)、義務 (duty)、そして永続性 (permanence) の価値を公言した。近代のアメリカ家族は、友愛、パーソナリティの成長、そしてその成員の幸福の価値を強調する。(Burgess [1954] 1974: [16] 307; ただし下線は筆者)

バージェスは、人間の行動は、そのほとんどが生物学的ではなく、社会的な行動であると論じ、人間の価値は、集団の価値から導き出されたものであると論じる。さらに、社会学者自身の個人主義と民主主義のモーレスに関しては、次のように述べている。ここには、バージェス自身の社会学者の立場性についての熱(暑)い主張が見られる。

価値は、社会学の中心的な主題である。個人的価値と社会的価値の性質、そして状況が変化するにしたがってそれが修正されていく性質は、個人的ドキュメントを得ることによって、そしてケース・スタディ法を用いた準備段階の調査でもっともよく明らかになる。価値を研究するというのはかなり難しい。しかしそれらの変わりやすさを認識し、客観的でありさえすれば、困難を乗り越えることができる。しかしながら、価値に関する調査は、社会学者に社会に対する価値の独裁者としての資格を与えるものではない。社会学者の役割は、発見したことを提示

し、問題を分析し、傾向を指摘し、そして違った方向性の行為の結果を示してみせることに限られている。しかしながら、社会学者としての社会学者は、ある〈一つの価値〉は、勇気を持って、力強く守り抜かなくてはならない。その一つの価値とは、思想、教育、そして調査をおこなう〈自由〉である。しかし、それを守り抜かなかで、社会学者は「決議を可決する」ような役に立たない行為をとるべきではなく、その果たすべき使命にとって最も強力な武器を採用すべきである。この武器とは、秘密の武器などではない。それは論争中の問題に対する調査であり、言論、結社 (association)、宗教、調査の自由という我々のいとおしき価値を消滅させ、破壊するように用いられている方法に対抗しておこなう調査なのである。(Burgess [1954] 1974: [20] 313)

部分的に自然科学の方法に依拠しようとしているなどの意味で、いささかナイーブにも思えるバージェスの価値論ではある。しかし、いずれにせよ、人間の価値、社会の価値は、社会調査の一つの道具である個人的・人間的ドキュメントを得ることで明らかになるとバージェスは考える (cf. Burgess 1945a, 1945b, 1955b)。さらには、社会調査の自由、そして社会学者の自由。これはアメリカの社会学者であるバージェスにとって譲れないものであった。バージェスの人道主義的な価値観は、社会にかかわろうとする一つの形態であった。

5 エイジングの問題における人間的側面

5.1 エイジングと「態度」

こうしたバージェスの人道主義に基づく社会的弱者への視点は、後年、一つには老年社

会学の仕事で現実化する (Burgess 1950 [1980], 1955a; [1957] 1980; 1960a, 1960b, 1960c)。

バージェスは、社会的弱者、とくに高齢者の「人間」的側面について論じている。それは、高齢者の価値と基本的な望みについてである。「スティグマ」は、ゴフマンらによって洗練化された概念であるが、それよりも以前に、バージェスが高齢者の「人間的側面」を論じるなかで用いている。これらは、バージェスが、社会の変動とともに高齢者の地位が低下したと論じているように、先に述べたような「近代社会」の論議と響きあっている。さらには、いうまでもなく、人間的側面は、心理学的あるいは行為者論的な観点を越えた社会の文脈でとらえられるものである。

バージェスによれば、加齢 (エイジング) の問題の人間的側面は、高齢者の態度と欲望にもっとも明確に見られるという。バージェスは、社会政策の展開に関係してくる高齢者の「態度」として、4つ挙げている (Burgess 1955a: 51)。第1に、先にも触れたことであるが、「年を取っている」とレイベリングされることの拒否」である。60代や70代の人々は、自分自身を「年寄り (aged)」もしくは「老人 (old)」とすら思っていないということである。彼らは自分自身を「ミドルエイジ」もしくは、たかだか「年長者 (elderly)」ととらえている。彼らは80代になってようやくはじめて「老人」もしくは「年寄り」であると認めるのである。

第2に、個人としての認識である。これは、65歳以上という「生活年齢」で、高齢者というカテゴリーに一括されることへの不満をあらわしている。彼らは、能力、才覚、生産性の面でかなり個人差があることを強調し、社会の人びとに対して、理解を求め続けている。

第3に、「エイジングに関する新しい知識

への関心」である。生理学者、臨床医学者、心理学者、社会学者らがエイジングのプロセスについて見いだしている知見について、高齢者たちが大きな関心を寄せているということである。

第4に、「エイジングの福祉に向けた計画への参加」である。高齢者たちのための政策やプログラムを制定するのに、積極的に協力・参加するということである。

5.2 高齢者のもっている社会的な「欲望」

次に、態度とセットでバージェスが論じているのが、高齢者たちの人間的な価値と望み・欲望である (Burgess 1955a: 51-3)。

バージェスが主張するのは、高齢者の世代の価値と基本的な望みは、子どもや老年世代に達していない大人のそれらと基本的に異なるものではないということである。すべての世代の人間と同じであるが、高齢者の欲望は、主に4つの側面にとらえられる。これらの価値は、老いゆく人々にとってとりわけ重要なものであるとバージェスは言う。

第1の欲望は、意味のある活動である。1950年前後の当時の研究が示していたのは、一定の年に達することで退職した人、もしくはこれから退職を迎える人にとって、仕事の意味は何かということである。仕事というのは、彼らの時間を規制し、日常生活化し、仕事仲間とかかわり、彼らの技術を活用し、認知を得、地位を獲得し、自分は有用だという感覚をはぐくみ、活動を創造し、他人に奉仕する自己表現を見つけるための生活様式である。当時の調査結果によれば、そうした仕事は、生きていくための唯一の方法ではないし、第一に優先するものではないということである。というのは、こうした仕事の意味のいくつかは、仕事でない活動でも見出されるのである。それはたとえば、仕事以外での友だち

とのかかわりや、支部、組合、教会への自発的組織への加入といったものである。実際には、上に述べたこれらの意味は、余暇時間の活動でも見出されるだろうし、また実際、見出されていることも多いものである。事実として、レクリエーションは、退職した人びとにとって、それまで仕事で担っていた価値の表現を可能にしてくれるような、替わりとなるものなのである。

退職するというのは、他の活動よりも仕事に大きな意味づけをしていた人ほど、危機的な状況となる。逆に、事実として、仕事に何の意味も見出していなかったり、もしくは否定的な意味しか見出していない人にとって、退職はそれほど困難なことではないのである。

第2の欲望は、安心感である。バージェスは、近代社会への移行という社会的な文脈のなかで論じる。市民化のプロセスによって農村から都市社会へと移行していくことで、以前の人びとによって享受されていた古いタイプの経済的、精神的安定を期待することは難しくなった。高齢者たちは、アメリカ社会の中でも、もっとも不安を感じる集団となった。経済的に不安定であるにもかかわらず、自分たちの子どもたちから経済的な援助を受けることが期待できない高齢者が増え続けている。社会保障は受けられるのであるが、とくに当時のインフレーションと物価の高騰という状況下では、多くの高齢者にとって、必要最低限の生活レベルを保つには、彼らの収入が不十分であることに気づいていた。

だが、高齢者の不安は、経済面だけではなく、精神面、社会面でも不安を感じていたのである。バージェスによれば、この心理的な不安は、社会における高齢者の役割が不確かであり、低下していることから起きているのだという。

アメリカ社会は、高齢者を「生活からリタ

イヤした」存在として見る傾向がある。彼らにも「彼らの時代があったのだ」、彼らは「以前、そうであった」というような言われ方をされる。彼らは自分たちの状況を受け入れ、いわば生活から退任し、「華麗に 加齢する」ように訓戒を受けるのである。

それゆえ、当時行われたインタビューでは、高齢者の口から苦痛と敗北感をともなった語りが噴出する。彼らが「捨てられた」「柵の奥にしまわれてしまった」「牛のように放牧に出された」と語るのには、理解しうることなのである。なかには、玄関口にロッキングチェアを出して座り、「世界が過ぎ去っていくのを見る」ことで、自分自身と折り合いをつけようとする人もいる。

バージェスは、後年の一連のスティグマに関する論議を予期するかのような指摘をおこなう。バージェスによれば、このタイプの精神的、社会的不安は、高齢者が社会の中で地位を認められ、改善されれば、おそらく緩和されるであろうという。高齢者の心配の種となっている3つ目の要因は、彼らの将来の不確かさである。こうした気持ちになる主な原因は、生活のための処遇がだんだんと不安定になってきていることにある。社会が近代化する以前は、中年期に住んでいた家を終の棲家とすることができた。あるいはともあれ、老いゆく人びとも、彼らの子どもと一緒に住むのを楽しみにすることができた。だが、こうした家についてのかつての確かさは、いまや不確かなものに変化してしまった。老いゆく人びとは、その低下した地位を考えれば、中年期に住んでいた住居に住み続けることが、物理的にも経済的にも、困難である。子どもと住む望みはなかなかもたなくなってきているばかりか、事実、同居は上の世代も若い世代も望まなくなってきているのである。それはますます、不確かさが増大していることに

由来しているとバージェスは言う。

第3の欲望は、愛情と社交性である。愛情の相互交換は、特徴として家族成員間か、あるいは親友のあいだでおこなわれる。社交が実現するのは、とくに老年世代の仲間において、友人のあいだの社会関係において、親密集団においてである。だが、人は年をとるにしたがって、年老いた両親や兄弟姉妹、配偶者、あるいは場合によっては子どもの死によって「喪失」を経験する⁵⁾。彼らは、死、引越、その他の不慮の事故によって、若かった時代や中年期の友人とのつながりを失う。多くの高齢者は、年を取ってから新しい友人を作ることは難しいと感じている。エイジングの一つの悲劇的な帰結として、寂しさという感情があるのである。

4つ目の欲望は、自己同一化と参加である。人のアイデンティティは、制度（体）やその他の組織化された集団の成員になったり、あるいは成員とならなくとも「参加」という形をとったりすることと密接に関連している。大多数の高齢者は、制度や集団などへ参加し続け、活動範囲を広げているというよりもむしろ、表面的に接触しているにすぎない。これらの自己同一化の喪失を確信することで、

5) 第二次シカゴ学派の一員とされることもあるストラウスは、グレイザーとともに、死にゆく患者に対処する看護師の事例において「喪失」の概念を研究している。それぞれの場で、看護師たちが経験した社会的喪失はさまざまであった。社会的喪失 (social loss) とは、ある患者が亡くなることによって、家族や職業がこうむる喪失・損失のことである。これによって死期が近づいている患者に対する看護師の対応は変わる傾向にある。グレイザーとストラウスが定式化したことで有名な、グラウンディッド理論における理論カテゴリーの一つである (May 2001=2005: 244)。また、ストラウスは、パークラ初期シカゴ学派の「社会的世界」の概念を展開させたことでも知られている。エイジングの関連で付言しておけば、ストラウスは、シカゴ社会学の遺産を生かし、社会的世界の概念を用いた高齢者研究である Unruh (1983) の序文を書いており、同書で論じられている高齢者の社会参加の重要性について評価している (Strauss 1983: 10)。ただし、同書では、バージェスのエイジング研究については触れられていない。

高齢者の心は押しつぶされたようになる。急な通知で退職を迫られ、とくに名誉的な地位が与えられることもない。彼は自分をやめさせた会社に対して不満を覚えるだろう。彼の組合はもはや、彼が会議に出席することを許さないかもしれない。もしくは、会報さえも受け取れないかもしれない。彼の所属していたクラブやその他の組織は、財政的な理由で名誉的な地位を与えないために、そのメンバーであることをあきらめることを余儀なくされるかもしれない。それゆえ、高齢者が、自分にとって重要な集団に自己同一化し、参加することが必要なのである。

こうした高齢者の基本的な欲求、すなわち意味ある活動、安心感、愛情と社交性、自己同一化と参加、の分析をおこなうことで、高齢者が今持っているものと、生活の中で彼らが欲しているものとのあいだには、かなり深いギャップがあることが明らかになるとバージェスは論じる。

6 おわりに

これまで本稿においては、バージェスの「人間」概念を抽出して検討してきた。まず、第二次シカゴ学派の社会学者による仕事との関連性を示唆するような、バージェスの人道主義にかんする記述を考察した。次に、バージェスが、「人間性」の概念は、動的な近代社会において立ちあられる無視し得ないものであると考えていたことが示された。そして、バージェスの「人道主義」が、個人と社会との動的過程をとらえる「価値」の一つであることが明らかとなった。さらには、バージェスの後年のエイジング研究において、高齢者の態度や欲望などの「人間的側面」は、動的な近代社会のなかでたちあられるいわば社会的なものであることが示された。

以上のようにバージェスは、人間性、人道

主義、人間的側面といった概念で、「人間」についてとらえている。たしかに、人間性、人道主義、人間的側面と形を変えてはいるが、そこには共通点がある。それは、月並みな理解ではない、プラグマティストやW・I・トマスらが強調したような、個人と環境の相互作用という視点である。

「人間性」の概念から明らかになったのは、一つには、人びとの感情、態度、願いといったものは、近代以降の社会的な状況のあらわれの一部であるということであった。「人道主義」の概念から明らかになったのは、一つには、アンダードッグの視点から制度の問題点を追求するということであった。こうした視点は、1960年代のエスタブリッシュメントへの抵抗運動の潮流に後押しされながら、第二次シカゴ学派の社会学者の仕事に継承されていった。「人間的側面」の概念から明らかになったのは、例えば高齢者など、社会的弱者の立場にある人の社会的参加の欲望と困難、さらにはその重要性であった。

本稿では問題意識として、第二次シカゴ学派のアンダードッグの視点の源流となる、バージェスの「人道主義」を強調した。だが、すでに本稿でも随所で示唆してきたように、バージェスの論考にたちあられる「人間性」や「人間的側面」もまた、第二次シカゴ学派の人びとの道徳的感覚と類似している。たとえば人間性については、ゴフマンがスティグマ論のなかでの試みのなかに見られる。再度述べれば、ゴフマンがおこなったのは、高齢者など社会的弱者の人びとの問題を、「人間性に関するごくわずかの前提」にもとづいて組織化するということであった（Goffman 1963=1970: 245-6）。人間的側面については、ヴァンカンが、第3世代のヒューズからゴフマンらの第4世代への道徳的感覚の流れについて論じている。

社会の周縁に生きる人びと，《物言わぬ守衛たち》に対する彼の学問的関心は、道徳的怒りでもあった。それは笑いを、ついで熟考をうながす議論という表現をとるという形で通底していた。……しかしゴフマンや彼の仲間／同窓生の道徳的感覚は、強烈であり続ける。ただそれはスウィフト風のラディカルなユーモアで表現される。「人口過剰だって？じゃ赤ん坊を食べたらどうだ。肉はとても柔らかいぞ」。(Winkin 1988=1999: 52-3)

ヴァンカンは、ゴフマンに見られるシカゴ学派の影響を、「シカゴ・ハビトゥス」として3つ指摘している (Winkin 1999)。第1に、社会学的に理解するための概念や理論よりも、「そこで起こっていること」を重視する点である。第2に、世界を見る目は、「皮肉」に満ちているということである。第3に、研究スタイルとしては、「クール」である、ということであった。バージェス自身も、結婚や統計的手法に関する問題について「既婚者は独身者よりも長生きであることが示されているが、既婚者は本当に長生きなのか、それとも単に結婚生活が長く感じられるだけなのか」(Burgess [1927] 1974: [111-2] 279-80)。といった冗談ともとれる表現を用いていた。あるいは、近代化とともに社会的地位の低下した高齢者について、「俺は孫の友だちか!」, 「孫のベビーシッターに成り下がってしまった」と愚痴をこぼす様子を諧謔的に描いていたりする。こうした皮肉に満ちたクールな視点は、一つには、社会問題に対峙しようとする、バージェスの深い「人間」感覚とまったく関係がないとはいえないだろう。第二次シカゴ学派の社会学者たちには、初期シカゴ学派のバージェスの社会的感覚に根ざした「人間」概念が受け継がれてい

るように思われる。

参考文献

- Becker, Howard Saul, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, New York: Free Press. (= [1978] 1993, 村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社.)
- Burgess, Ernest Watson, 1916, "The Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology," *American Journal of Sociology*, 21: 492-500. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 264-72.
- , [1925] 1967, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Report," Robert E. Park and Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: The University of Chicago Press, 47-62. (=1972, 大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会, 49-64.)
- , 1927, "Statistics and Case Studies as Methods of Sociological Research," *Sociology and Social Research*, 12: 103-20. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 273-87.
- , 1935, "Social Planning and the Mores," *Publication of the American Sociological Society*, 29(3): 1-18. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 288-306.
- , 1945a, "Sociological Research Methods," *American Journal of Sociology*, 50(6): 474-82.

- , 1945b, "Research Methods in Sociology," Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore ed., *Twentieth Century Sociology*, New York: Philosophical Library. (=1959, 内藤莞爾訳『社会学研究法』誠信書房.)
- , [1950] 1980, "Personal and Social Adjustment in Old Age," J. Douglas Brown and Clark Kerr and Edwin E. Witte, *The Aged and Society*, New York: Arno Press, 138-56.
- , 1954, "Values and Sociological Research," *Social Problems*, 2(1): 16-20. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 307-13.
- , 1955a, "Human Aspects of Social Policy," *Old Age in the Modern World: Report of the Third Congress of the International Association of Gerontology*, Edinburgh and London: E. S. & Livingstone Ltd, 49-58.
- , 1955b, "Our Dynamic Society and Sociological Research," *Midwest Sociologist*, 17(1): 3-6.
- , [1957] 1980, "The Older Generation and the Family," Wilma Donahue and Clark Tibbits, *The New Frontiers of Aging*, New York: Arno Press, Ch. 12. = Bogue J. Donald ed., 1974, *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Community and Family Study Center, University of Chicago, 338-45.
- , 1960a, "Aging in Western Culture," Ernest Watson Burgess ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, 3-28. (=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 19-60.)
- , 1960b, "Family Structure and Relationships," Ernest Watson Burgess ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, 271-98. (=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 450-501.)
- , 1960c, "Résumé and Implications," Ernest Watson Burgess ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, 377-88. (=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 635-58.)
- Burgess, Ernest Watsons. Papers, Special Collections Research Center, University of Chicago Library, 1100 East 57th Street, Chicago, IL 60637.
- Burgess, Ernest Watsons. Papers Addenda, Special Collections Research Center, University of Chicago Library, 1100 East 57th Street, Chicago, IL 60637.
- Burgess, Ernest W. and Donald J. Bogue eds., 1964, *Contributions to Urban Sociology*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Collins, Randall, [1985] 1994, *Four Sociological Traditions*, New York: Oxford University Press. (=1997, 友枝敏雄訳者代表『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣.)
- Faris, Robert E. L., [1967] 1970, *Chicago Sociology: 1920-32*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1990, 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社.)
- Glazer, Nathan, 1966, "Forward," Edward Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*, Chicago: The University of Chicago Press, vii-xviii.
- Goffman, Erving, 1953, *Communication Conduct in an Island Community*, Ph. D. Dissertation (unpublished), University of Chicago.
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技 — 日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- , 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (=1970, 石黒毅訳『スティグマの社会学 — 烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)

- 宝月誠, 2004, 『逸脱とコントロールの社会学』有斐閣.
- 本田由紀, 2007, 「バッシングを終わりにしよう — 仕事力『誰も完璧ではない』」朝日新聞, 2007年7月1日(日)朝刊, 18.
- Janowitz, Morris, 1972, "Professionalization of Sociology," *American Journal of Sociology*, 78(1): 105-35.
- , 1973, "Introduction," Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 261-87.
- May, Tim, 2001, *Social Research: Issues, Methods and Process*, 3rd ed., Buckingham: Open University Press. (=2005, 中野正大監訳『社会調査の考え方 — 論点と方法』世界思想社.)
- 西川知亨, 2003a, 「初期シカゴ学派とE・F・フレイジア — 人間生態学的方法の「極相」と「萌芽」」『ソシオロジ』48(2): 91-107.
- , 2003b, 「フレイジア『シカゴの黒人家族』(一九三二)」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 135-42.
- , 2003c, 「初期シカゴ学派と人間生態学」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 263-4.
- , 2004, 「社会調査と人間生態学的方法 — 初期シカゴ学派におけるE・F・フレイジアを中心に」『社会学史研究』26: 129-43.
- , 2007a, 「E・W・バージェスと社会調査 — 「科学」の意味に注目して」『社会学史研究』29: 87-100.
- , 2007b, 「E・W・バージェスの社会政策論 — 社会改良・計画・福祉の展開」『現代社会研究』10: 105-17.
- 野田浩資, 2003, 「ヒューズによる『シカゴ学派の伝統』の継承と伝達」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 268-76.
- Park, Robert Ezra, 1929, "The City as Social Laboratory," T. V. Smith and L. D. White eds., Chicago: *An Experiment in Social Science Research*, Chicago: The University of Chicago Press, 1-19. (=1986, 町村敬志・好井裕明訳『実験室としての都市』御茶の水書房, 11-35.)
- , 1935, "Social Planning and Human Nature," *Publication of the American Sociological Society*, 29(3): 19-28.
- Rauschenbush, Winifred, 1979, *Robert E. Park: Biography of a Sociologist*, Durham, N. C.: Duke University Press.
- Strauss, Anselm, 1983, "Foreword," Unruh, David R., 1983, *Invisible Lives: Social Worlds of the Aged*, Beverly Hills: Sage Publications, 9-10.
- Unruh, David R., 1983, *Invisible Lives: Social Worlds of the Aged*, Beverly Hills: Sage Publications.
- Winkin, Yves, 1988, *Erving Goffman: Les Moments et Leurs Hommes*, Paris, Seuil/Minuit. (=1999, 石黒毅訳『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房.)
- , 1999, "Erving Goffman: What is a Life? The Uneasy Making of an Intellectual Biography," Greg Smith ed. *Goffman and Social Organization: Studies in a Sociological Legacy*, New York: Routledge, 19-41.